

日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.26(2), July, 2022

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 箱根合宿研究会情報
- ♪ 「若手の会」情報
- ♪ 第2回定例研究会情報
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告！

巻頭言

これからの時代を切り拓く「知」の探求

内山 治樹（筑波大学）

コロナ過で一気にグローバル化が進行した上にDXの必要性が顕在化し、AIやロボティクスと人間が競わなくてはいけなくなったデータ駆動型社会に移行しつつある現在、事物由来のデータ以上に人を対象とした行動データの重要性が唱道されている。ただし、AIはよりよい生き方を模索する上で便利なツールであるが、人の行動、就中行為には意図が、また、身体には意識が宿り、その各部位の動きには冗長性が存する、という厳然たる事実がある。とすると、これからの時代にはヘテロジニアス的な研究がさらに重視されることから、身体も含めた「事物の現実」と感覚や主観にかかわる「意識の現実」を併呑した「行為に直接する知」の活用は不可避であるといえる。

周知のように、哲学では伝統的に行為との直接的かかわりの有無に応じて「実践知」と「理論知」という区分（ライルが導入した知識内容の形式は措いといて）が行われてきたが、「体育・スポーツ・身体活動」（ユネスコ）に生起する様々な事象を「哲学的に思考する」われわれの分野で、果たして上記の二つの現実を架橋ないし超越するような「知」の構築は可能なのであろうか。

これまで二種類の知が存在し、二つの領域が在ったということは、或る同一の主題内容についてわれわれが二種類の知的態度を採ってきたことを意味している。しかし、実践知であれ理論知であれ、現実に行使されるとき、そこに「或る事実の認識」が含まれている点で主題は共有されていたといえる。ただ、前者の事実認識は単一の「・・・であった」という「そのつどの」な過程としてのみ体験され、このときの事実認識はわれわれによる認識行為としてというよりも、事実そのものとして認識される。つまり、実践知は「体験された歴史」をもたないがゆえに「語るべき起源」、すなわち「根拠」がないのである。他方、「・・・である」という「いつでも的」な後者の根拠とは単に語られた根拠でなく「現実に知られた根拠」である。要するに、両者の差異は「事実認識としての知の在り方」の違いではなく、実践知にあっては事実と直面した瞬間に実現され、理論知においては知的欲求に駆られた数多の意識的努力の末にやっと実現される、その「道のり」の違いなのである。

この違いを「知の認識形式」という視点から整理するなら、それが成り立つ前提は、言語化できない体験知や経験知あるいは体感と言葉を紐づける身体知などから成る実践知への埋没を峻拒し、あくまでも他者への説明性と伝承性と普遍妥当性を有する合理的な知である理

論知の行使に徹することで画されてきたといえる。それはまさに、「開かれた知」として集積されて他学問分野との交流を呼び込み、当然のことながら「行為に直接する知」の実践への貢献を果たすために、当該社会に継起する様々な問題を掘り起こしながら「知」ること、すなわち、理論化を確保するための営為を地道に重ねていくことであった。しかし、今後、AIなどとの共存がますます進展することを考えると、次なるステップは、「哲学的思考」の可能性を信じて、それら二つの「知」の二項対立を「脱構築」していくことであろう。

現場では状況に応じたアドホックな思考ないし判断が求められるのも事実である。逆に、メカニズムの説明のみで現象の生成は語られ得ない。しかしながら、「実践知 vs 理論知」という枠組みを解体することで実践への貢献がより一層図れるのなら、この先のわれわれの課題は、「理念的客観性」(フッサール)を旗幟としつつも、これまでの二つの「知」の「パルマコン」(プラトン)的扱いを唾棄することであり、われわれの対象は個人だけでなく集団をも含む「ヴァーチャル」(ドゥルーズ)な次元に存する、という事実の再認識である。そして、この課題が克服できれば、「事物の現実」と「意識の現実」とを統合・融合するばかりかダイナミックな横断的つながりを有する「行為に直接する知」は再構築され、事物と意識との普遍的な接続可能性を特徴づける有用で有益なデータが招来することとなるろう。

内山治樹 (uchiyama.haruki.fp@u.tsukuba.ac.jp)

体育哲学考

ボールゲームとは何か、また、体育でどのように指導されるべきか

土田 了輔 (上越教育大学)

ボールゲームとは何だろうか。この問いかけに、私と私の研究仲間は2003年から挑んでいる。「ゲーム構造論」と銘打って、いくつかの論文を発表してきた。

私たちは、ボールゲームをボール「移動」ゲームと再定義した。近年、学校体育で扱われているボールゲームは、すべからくボールを目標地点に移動するという基本構造を持っていることに着眼したからである。そして、ボールを移動していく上で、その企てを妨害する者がいるゲームと、ボール操作そのものに課題性があるため、妨害者が不在のものに分けた。後者は、たとえばゴルフやボーリングと呼ばれている種目があり、ボールゲーム研究の世界では「的当て型」などと呼ばれている。

では、前者である妨害者が存在するゲームはどのように呼ばれているかという点、ボールゲーム研究の世界では、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」などと称されている。

哲学的な議論に現状批判が必要だとすると、私たち研究グループは、このような「型」分類に疑問を持った。1980年代にイギリスのラフバラ大学に端を発した「理解のための球技指導運動 (TGfU: Teaching Games for Understand)」では、ゲーム中心、学習者中心の新しいボールゲーム指導が提唱され、その運動がアメリカ経由で「戦術アプローチ (TGA: Tactical Games Approach)」として日本に輸入された。この一連の展開の中で、先の3つの「型」は自明のものとして採用されてきた。実は南半球回りでも別種のボールゲーム指導の潮流があるのだが (Game Sense, Play Practice など)、そちらでもこの3つの「型」が不動の枠組みとして採用されている。

しかし、我々は考えた。ボールゲームがボール「移動」ゲームなら、プレイヤー達に共通の達成課題 (ボール移動側) は何か。それは、相手が構成する防御線を突破していくことではないか。そしてその先に、別種の課題 (的当てや進塁) が待っているものもあるというだけではないかと。我々が「課題」に執着したのは、このことが学校体育における「学習内容」になるからである。現在では、突破にあたり、ボールを進行させるためにプレイヤー達に課された課題は、「確保」と「進行」という2つの要素がある、といった具合に論が進化

している。ベースボール型の構造についても、世界で唯一無二の論を展開できていると自負している。

もう一つ、ボールゲーム指導に際して学校体育の世界で常識となっている考え方に対して大いなる疑問がある。それは、アメリカ流の「分解練習」を中心とする「戦術アプローチ」の効果である。この考え方は、「ゲーム中心」としながらも、個人によるボール操作の技能向上を目指した「ドリルゲーム」と、複数人による、ゲーム中の特定の課題を練習するための「タスクゲーム」という分解「練習」を組み合わせる授業を展開するものである。「○○ゲーム」という名称はついているが、要するに部活の指導で行われている分解練習である。私自身は「部活」指導を15年ほど行い、大学の地区オールスター・チームのコーチング・スタッフも務め、素人からプロになる選手まで育成してきた経験やデータから、分解練習がゲームで効力を発揮するには、何か月もかかるという事実を知っている。しかし、学校体育の世界では、これを45分授業×約10回程度の極めて短時間で成果を求めている。45分授業といっても「練習」に充てる時間は毎回せいぜい15分程度なので、合計150分の練習でゲームパフォーマンスが向上する「ことになっている」。150分の練習時間は、中学校の部活なら2日ほどであろうか。2日でパフォーマンスが向上するなら、部活はブラックにはならなかっただろう。「本当か？」と哲学したくなる。

土田了輔 (tsuchida@juen.ac.jp)

書籍紹介

福岡伸一ほか（2021）『ポストコロナの生命哲学』集英社新書

荒牧 亜衣（武蔵大学）

本書は、筆者がそでの告知文にひかれ手にとったものである。告知文には「災禍の中、生物学、美学、歴史学の研究者が集い、この難題に向き合った（中略）私たちの生きる拠り所となりうる「生命哲学」を問う」と書かれていた。

「集い」とあるが、あとがきによれば3名の研究者は実は対面で会ったことがないという。著者の一人である伊藤は、「わたしたちはまだ、お互いにどこかバーチャルな存在である」と述べている。体育や身体を研究対象とする本会も例外なく、研究会や会議といえばオンラインが当たり前の状況が続いている。こうした変化により私自身も例えば、移動時間がなくなるといった便利さを大いに享受してきた。一方で、それが何なのかははっきりしないままではあるものの、個人的にはいま、ここにおきていることに少なからず違和感を覚えながら日々を過ごしてきた。この違和感の正体や著者たちのいう「ポストコロナ」への関心を軸に本書を読み進めてみることにした。

伊藤は、日本で初めて緊急事態宣言が出された2020年4月7日頃をふりかえりながら、全盲の人や難病を持っている人とZoom飲みをした際のエピソードとして「みんな障害者になったね」というやりとりを紹介している。自分のせいではなく、環境が原因で自由を奪われるという経験を今、みんながしているという意味の言葉として出てきたという。そうだった。年単位で続くコロナ禍は、いろいろなことが自分の思い通りにいかないことも日常に変えていった。SNSなどさまざまあるオンラインツールにさらされることで、なるべく今まで通りを目指されたような気もするけれど、自分がコロナ以前だったらどうしていたのか、あるいは、どうしたかったのか、どうすべきだったかさえ考える余裕をなくしていたようにも思う。本書において伊藤は、自身の研究方法を紹介しながら昨今の状況を考察しつつ、接触しないことにより、相手の具体的な状況が分かりにくくなるために、共感が難しくなると指摘する。その上で、伊藤は「道徳」と「倫理」を区別する重要性を強く主張する。今求められることは「○○すべきだ」と一般論を振りかざすことではなく、「この状況では何ができるだろう」「相手はどのような状況にあるのだろう」と探る倫理的な態度、相

手に「聞く」ことだという。

さらに、農業の現代史を専門とし、「食」について研究する藤原は、コロナと給食の問題について依頼を受けて執筆した際に「歴史の転換がリアルタイムで起こっていく、しかも人間だけでなくそれ以外の生物やウイルスも含めた「生命観」が大きく動いているイメージを持つようになった」という。コロナ禍においては、感染対策の一環から学校給食が休止となったり、黙食が推奨されたりという事態が引き起こされたわけだが、「食」にまつわるこうした変化は、歴史的にみても社会のひずみをあぶりだすことにつながっているとも言及する。ここでいう社会のひずみの中には、「コロナが蔓延していく中で次々と明るみに出てきた貧困、DV、児童虐待」が含まれる。藤原は、ヨハン・ガルトゥングの「構造的暴力」を引いて、その特徴を次のように分析する。「誰が加害者なのかがあいまいで、しかも加害者が危害を加えている意識が非常に薄く、その上で「サステイナブル」であるため、被害者の側は日常的に苦しめられている、これが構造的暴力の特徴です（中略）直接的暴力とは違い、メディアの報道に乗りやすく、人々が知る機会が少ない（中略）ただ、本当に重要なのは、私たちが知ろうとしなかったこと」である。

伊藤や藤原のいう「聞く」ことや「知ろう」とすることは、本書が示す「自然（ピュシス）の歌を聴け」ということの一例であろうか。もう一人の著者である福岡は、すでにまえがきにおいて「ポスト」（post/後の）コロナの課題は、「アンテ」（ante/前の）コロナの課題の継続もしくは発展であることが、ここでは確認されていくだろう」と述べていた。「アンテコロナに山積みにした課題に取り組むタイミングがやってきたと考えるほうが正しい」という福岡の指摘は、私の違和感の正体の一部をときあかすものでもあった。

荒牧亜衣 (ai.aramaki@cc.musashi.ac.jp)

私の研究

ポルトガル発サッカー思想の展開研究

上泉 康樹（広島大学）

2013年の会報でも紹介させて頂いたように、私が現在も取り組んでいる研究は、サッカーの「戦術的ピリオダイゼーション *periodização tática*（以下『戦ピリ』と略記）」についてです。このポルトガル発のサッカー思想は、ポルト大学元教授（スポーツ哲学）、ヴィトール・フラデー氏によって1970年代中頃に創案されましたが、2000年代以降は、欧州のサッカー界を席卷したジョゼ・モウリーニョ氏（現ASローマ監督）によって採用されたことで、トレーニング理論としても一躍有名となりました。昨シーズンの2021-2022年には、フラデー氏の教え子であり私の研究仲間でもあるジョルジ・マシエルがLOSC リールの第2監督としてフランスリーグ1部優勝を果たし、同じ研究仲間であるカルロス・クエスタもイングランドプレミアリーグのアーセナルFCでトップチームのコーチとして活躍しています。

また「戦ピリ」は、サッカー界におけるその影響力と同時に、バスケットボールやハンドボール、クリケット、野球などの指導者、さらには、ラグビー日本代表を指揮したエディ・ジョーンズにも大きな影響を与えています（結城康平著「戦術的ピリオダイゼーション総論。ゲームモデル＝「複雑系」への対応」『footballista』<https://www.footballista.jp/> 2019.05.28）。とりわけ最近では、従来の「戦ピリ」を批判的に乗り越えるべく、イングランドのシェフィールド・ハラム大学教授（スポーツ心理学）、キース・デイビッツ氏によって提唱された「エコロジカル・トレーニング」（以下『エコトレ』と略記）」というポルトガルのマデイラ島発の新たなサッカー思想がすでに注目を集めており、実際にレアル・マドリードやFCバルセロナ、ASモナコなどのビッグクラブにおいて、この理論にもとづくメソッド改革が進められています。

なお残念ながら、ここ3年以上、新型コロナウイルス感染症の影響で海外渡航ができない状況が続く、「戦ピリ」の国際カンファレンスへの参加や欧州サッカーのトレーニング視察などは事実上ストップしていますが、私自身の研究活動としては、オンラインミーティングや動画による情報収集をはじめ、「戦ピリ」や「エコトレ」から着想を得た「サッカー哲学の展開」いわば「ポルトガル発サッカー思想の展開研究」の成果の一部を少しずつ公表してきています（木庭康樹ほか著、佐藤高晴責任編集：第6章「スポーツにおける左と右—サッカーの対称性と反対称性をめぐって—」『左と右・対称性のサイエンス』叢書インテグラレ 015, 丸善出版, 97-129 頁, 2017. / 上泉康樹ほか著, 樋口聡教授退職記念論集・編集委員会編集：第二部スポーツ, 第四章「身心文化論としての『足球文化論』—サッカーの源泉をめぐる思索—」『身心文化学習論』, 創文企画, 64-85 頁, 2021.).

最後に、これまで私は、公益財団法人日本サッカー協会および47都道府県サッカー協会のインストラクターとして指導者養成事業に関わらせて頂きながら、先の「戦ピリ」や「エコトレ」についても多くの指導者の方々と情報交換や議論を重ねてまいりました。その結果、日本のサッカー指導も、サッカーの本質を捉えた、よりリアリティのあるものへと進化し、一方的なティーチング形式から問題解決型学習や制約主導型アプローチへと大きく変わりつつあります。武道から野球、そして、サッカーへと受け継がれてきた、日本の教育における「ロールモデル」と、ポルトガル発サッカー思想の「チカラ」、この両者の統合がなされた時、今後スポーツ哲学が社会に対してあるべき一つの形が見えてくるのではないかと期待して、日々研究を続けています。

上泉康樹 (kiniwa@hiroshima-u.ac.jp)

箱根合宿研究会情報

箱根合宿研究会 2022 遠隔開催のご案内 (第2報)

大津 克哉 (東海大学)

すでにご連絡申し上げておりますが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、令和4年度の「箱根合宿研究会」はオンラインで実施することになりました。非対面とはなりますが、研究発表をはじめ問題提起や討論、情報交換の会(当該領域の院生の紹介など)を予定しています。なお、特別企画につきまして、企画案を募集します。奮ってご参加下さい。

期日：2022年9月17日(土)、18日(日)

☆日程表(申込みの状況によって、多少変更になることがあります)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20時
17日(土)			研究会①			研究会②						オンライン懇親会		
													(大学院生による研究小報告とディスカッション)	
18日(日)			研究会③		事務協議									

☆特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見をお寄せください。大津 otsu@tokai-u.jp までよろしくお願いいたします。

☆費用：無料 オンライン (Zoom) 開催 URL は後日ご連絡いたします。

☆8月31日(水曜) 必着にてお申込み下さい。

・Eメール：お名前、ご所属、メールアドレス、研究発表の有無、発表演題名(発表がある)

場合) 東海大学 大津 (otsu@tokai-u.jp) までお知らせください。

- ・参加予定に変更が生じた場合は、速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・不参加の方で近況報告をいただける方は担当者までご連絡下さい。
- ・すでにお申し込み頂いている方は、変更がございましたらお知らせください。

☆詳しい「プログラム」は、9月中旬にお送りする予定です。

合宿研究会担当運営委員：大津克哉

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

東海大学 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科

E-mail: otsu@tokai-u.jp Tel: 0463-58-1211 (代表) Fax: 0463-50-2056

(お問い合わせは、なるべく E-mail をご利用下さい。)

夏期合宿研究会担当 大津克哉 (otsu@tokai-u.jp)

若手の会報告

活動状況のお知らせ

中澤 雄飛 (帝京大学)

(1) 2022年3月に開催された「第2回日本体育・スポーツ・健康学会 若手の会セミナー (テーマ: キャリアの広げ方)」の報告書が、若手の会のホームページに掲載されました。

(2) 本領域に所属されている野上玲子先生 (江戸川大学) の若手研究者コラムが、第60号として若手の会のメーリングリストにて会員の方々に配信されました。こちらも若手の会のホームページからご覧頂けます。

●日本体育・スポーツ・健康学会 若手の会 ホームページ URL

<https://taiiku-gakkai.or.jp/wakatenokai>

(日本体育・スポーツ・健康学会のトップページにもリンクがあります)

日本体育・スポーツ・健康学会若手の会では、メーリングリストやホームページを通じて研究者間の交流や若手研究者に向けた情報発信をおこなっています。年齢の制限はありませんので、どなたでも会員になることができます。メーリングリストの配信をご希望の方は、上記の若手の会ホームページにある「ML登録」のフォームよりご登録ください。

また、若手の会へのご意見等がございましたら、担当の中澤までお寄せ頂きますと幸いです。どうぞ宜しくお願いいたします。

若手の会担当 中澤雄飛 (ynakazawa@main.teikyo-u.ac.jp)

定例研究会

第2回定例研究会案内

森田 啓 (大阪体育大学)

2022年度「第2回定例研究会」

日時：11月下旬～12月上旬の土曜日を予定、会場は未定。

申し込み：10月中旬を予定。詳細は決まり次第 HP に掲載し、メーリングリストで配信します。

森田啓 (hirakumorita@ouhs.ac.jp)

事務局より

田井 健太郎 (群馬大学)

○ 「日本体育・スポーツ・健康学会 第72回大会」について

本年度の日本体育・スポーツ・健康学会大会についての情報は、大会 web (<https://confit.atlas.jp/guide/event/jspehss72/top>) にて閲覧することができます。本専門領域に関連するプログラムも、この学会大会 HP に公開されております。現時点で公開されている日程は次の通りです。

・大会3日目 9月2日(金) 会場：順天堂大学

- 浅田学術奨励賞・記念講演 12時00分～13時00分 会場：2-46 (順天堂大学)

テーマ スポーツ指導と暴力をめぐる思考 -スポーツ科学は暴力の克服に資するのカー

司会 関根正美 (日本体育大学)

演者 高尾尚平 (日本体育大学)

- 総会 13時20分～14時20分 会場：2-46 (順天堂大学)

- 口頭発表 14時40分～16時14分 会場：2-46 (順天堂大学)

○ 住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会事務局 (<https://taiiku-gakkai.or.jp/admission>) にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿と連動しております。

また、専門領域メーリングリスト (talk@pdpe.jp) にご登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。こちらに関しては、事務局 (bureau@pdpe.jp) までご一報ください。メールアドレス変更の際も、事務局までご一報ください。

お詫びと訂正

会報第26巻1号に誤表記がございました。

編集委員会よりお詫びして訂正させていただきます。

「巻頭言」2頁17行目 (誤)「中村敦」→(正)「中島敦」

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は、広報担当：田中 (ai.tanaka@meisei-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

.....

体育哲学専門領域会報第 26 巻第 2 号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域
関根正美（代表）
編集者 釜崎 太, 田中 愛, 石垣 健二（広報担当）
発行日 令和 4 年 7 月 31 日
連絡先 〒371-8510
群馬県前橋市荒牧町 4 丁目 2 番地
群馬大学共同教育学部 田井健太郎 気付
電話：027-220-7326

【編集後記】

察しのよい方は、お気づきかもしれません。今号の巻頭言・体育哲学考・書籍紹介・私の研究の執筆者は、もともと球技を実践・指導されてきた先生方です。私個人は、直接・間接的にも、その先生方の研究のバックボーンを感じながら読ませて頂きました。執筆者の先生方、誠に有り難うございました。そんな裏の括りもあつたりしますので、どうか執筆依頼がありましたら、ハイ！カイエス！でお願いいたします。また面白い括りがありましたら、ぜひ編集委員にご一報ください。

ところで、今回は第何波になるのでしょうか。健康はもちろん、どうかそれで人間の関係性が失われませんように… (I).